

## ひびきの声

上田藤市郎

藤樹書院を学びの場とすることが大切だと思い、毎月第一日曜日午後論語などの講読を続けてきた。先月の論語の一文は、「子夏曰小人の過也必文」である。つまり、「子夏が言った、小人が過ちを犯すと、きつとつくり飾ってごまかそうとする。」という内容である。

今の日本の世相、総理をはじめ与党の国会議員、官僚、スポーツ指導者、自動車会社社長の発言を聞くと、我が国の指導的立場にあるべき人物がこぞって小人であることがわかる。多くの国会議員がそのような風潮に異を唱えることもなく唯々諾々として大勢に逆らおうとしない。これらの人たちは自分の言動の過ちを自ら知りながら、これを恥じないようになってしまったのである。

藤樹先生が、自分の生き方に極めて厳しく、内村鑑三が驚嘆したような、誠実に生きるという誇りを、多くの普通の日本人は決して失ってはいない。ところが、社会的に指導的立場にある人たちは、自分の地位を守るために矜持を捨て、厚顔無恥になってしまった。このような言動は青少年に有害であることにも気づかず、それでおお、国民の信頼を得ていると勘違いしているのである。

## 「藤樹紙芝居」の紹介⑪

## 『竹生島での出会い』

(解説)

中江藤樹先生には数えきれないほどの逸話が残されています。今回は先生三十二歳の夏、弟子と共に琵琶湖に浮かぶ竹生島を訪れた実話に基づき『竹生島での出会い』として紙芝居に取り上げました。

先生母子と世間から疎外された若者との間で交わされる会話を通して、先生が優しく人を差別せず、慈しみの気持ちをもつて、若者の冷たく凍りつき、貝のように固く閉じた、荒んだ心を少しずつ解きほぐして、若者を夢のある社会へと導き、更生させていく過程を描きました。

藤樹先生の言葉に「人はだれもが美しい心を持っている。」というお話があります。大人も子供もみんな



が、自分の心の鏡を常に磨いて美しい心を持ち続けていきたものです。

(紙芝居)

① 空は青空、いいお天気です。

与右衛門 「お母さん、とてもいいお天気になりましたね。今日十五日は、竹生島の弁天様のご縁日(えんにち)ですから、お参りしましょう。びわこも静かだし、気持ちがいいと思いますよ。」

お母さん 「えっ、弁天様のご縁日に連れて行ってくれるのですか。ありがたいですね、喜んでお参りしますよ。」

与右衛門さんとお母さんは、横江の浜から、舟に乗り込むと、船頭さんがゆっくり船をこぎ始めました。

船頭 「今日は、お天気は良いし、波も静かだし、きつと、弁天様は、いっぱいの人で、おおにぎわいですよ。」

船頭さんのこぐ舟も、気持ちよさそうに、すいすいと進んでいきます。やがて船は、竹生島に着きました。

与右衛門 「わあ、おおぜいのお参りの人で、お店も、たくさん出ていますね。さあ、鳥居をくぐると、長い石段を上りますから、足元に気を付けてくださいよ。」

お母さん 「はい、ありがとう。しかし、こんなに多くの人が、お参りされるんですね。」

与右衛門さんと、お母さんは、お店の前を通って、弁天様への長い石段を上り、本堂の前までやってき

した。

② 与右衛門 「お母さん、ここも、人がいっぱいですよ。」

お母さん 「そりゃ、ご縁日ですからね。さあ、お参りしましょう。」

与右衛門さんと、お母さんは、まわりの人たちに、押されるようにして、弁天様に手を合わせ、お参りしました。

与右衛門 「お母さん、それでは、そろそろ舟のところへ、帰りましょうか。」

お母さん 「そううですうね、」

二人が歩き始める

と、その前の方で、着物は破れ、汚

れた一人の若者が、地面に座

つて

若者 「おめぐみを、おめぐみ！」

と、お茶わんを差し出して、通る人

たちへしきりに声をかけ、お金をも

らおうとしているのです。しかし、

横を通る人たちは、誰もその若者を

相手にせず、通り過ぎて行きます。

与右衛門さんと、お母さんも若者

の前を通りかかりました。



た一人の若者が、地面に座つて若者 「おめぐみを、おめぐみ！」と、お茶わんを差し出して、通る人たちにしきりに声をかけ、お金をもらおうとしているのです。しかし、横を通る人たちは、誰もその若者を相手にせず、通り過ぎて行きます。与右衛門さんと、お母さんも若者の前を通りかかりました。